冬の朝　水面から立ちのぼる川霧
春の陽光を映すさざ波の揺らめき

目の前で刻々と変化し、形をとどめることのない自然現象は、古来人々の心を魅了し、多くの画家に様々なスタイルで描き継がれてきた。

浅野有紀の「刻の波（ときのなみ）」をはじめとするシリーズにも、水面の波紋や反映といった実在の景色を彷彿させる作品が見られる。日本の伝統的な画材である絹、墨、岩絵具等を用い、滲みやぼかしを活かした技法は、水辺の景観との親和性も高い。さらに近年の作品には、具象的な表現から、光や大気の本質的な把握へと向かう、深化が認められる。

絹布の表面に淡い墨や藍でかたちを描き、裏面から岩絵具や金泥の仄かな彩色を重ねて奥行きを表す手法は、作者自身の試行錯誤と画材研究から生まれた。ひと筆ごとの速度や長さにまで配慮した墨の形象と、有るか無きかの裏彩色の積み重なりが、大気の波動となって立ち現れる。東洋の芸術において、形の正確さや構図の巧みさより大切にされてきた「気韻」の表現にも通じる独自の絵画空間である。

その繊細なうつくしさを味わうには、自らの意思で波間に漕ぎ出す必要がある。「みる」という行為に意識を集中し、丹念に重ねられた色層のゆらぎに身をゆだねることで得られる一体感――鮮明な画像に溢れた日常とは一線を画す、たしかな視覚体験がそこに在る。

本作品集は、そのための小さな渡し舟である。本としての落ち着きを具えた頁を開けば、作品本来の色彩や空気感を誠実に伝える図版が、老練な船頭のように波上へ導いてくれることだろう。その先に、手にした人それぞれの記憶が「刻の波」としづかに響き合う、ゆたかな感覚の海原がひろがっている。

古川 文子
（岡山県立美術館 学芸員）

描かなければ出会えない景色がある。
筆に乗せた色彩の時間は大気の波動となり
にじみと寄り添いながら静かに記憶へと問いかける。

そのまなざしがより深遠なゆらぎへ導くことを求めたい。

浅野 有紀

There is scenery that you can only see when you paint.
Colours on the brush, stroke by stroke, metamorphoses into wavering ripples of the atmosphere along with passing time.
They blur into the surface and create an image which quietly reflects one’s own past.

I hope my approach will lead me to represent even deeper fluctuation of the atmosphere.

Yuki Asano